

経験した

助けて頂いた

若手研究者が考える現場に教わった研究

～せめて漁師とともにありたい～

藤原 邦浩（水産機構日水研）



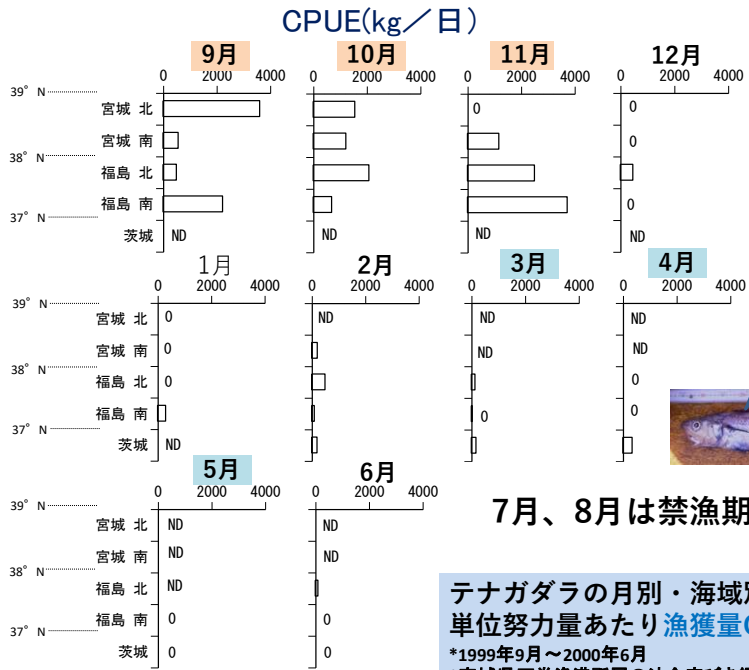
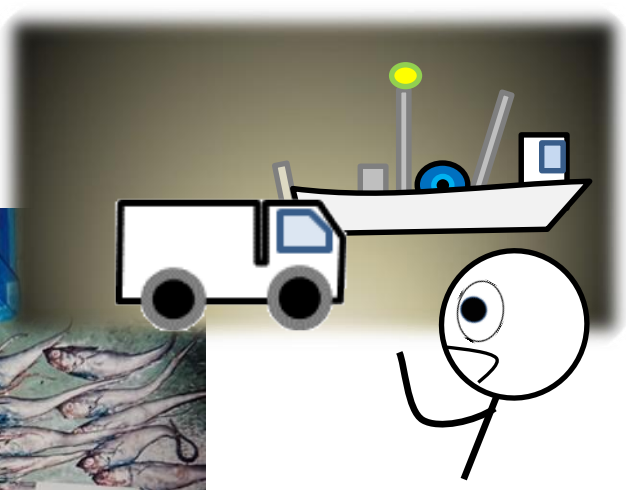
はじめての漁業現場

材料と方法

宮城県石巻港に、月数回、車で通う
 深夜、寄港する龍神丸を待つ
 入港後、氷・発泡箱を積むのを手伝う
 サンプルをバケツに入れてもらい持ち帰る

早朝、大学にて精密測定・耳石採取
 耳石薄片を作成 輪紋観察

テナガダラ、漁獲量統計はなく、
 漁労長に依頼した操業日誌にて
 分布の季節変化を調べた。



漁師さんも
 秋に漁獲し
 てるね〜。



7月、8月は禁漁期

テナガダラの月別・海域別
 単位努力量あたり漁獲量CPUE (kg/日)
 *1999年9月~2000年6月
 *宮城県石巻漁港所屬の沖合底びき網漁船2隻の操業記録より

学生が頂いたもの

(漁師さんは三倍返し)

- ・ テナガダラ等の魚類標本 + a
- ・ 漁獲情報 (操業日誌)
- ・ 分布移動の特徴やイメージ
- ・ 水揚げ現場での経験・マナー
- ・ 変わった魚
- ・ プロッターの海底情報

調査船に提供

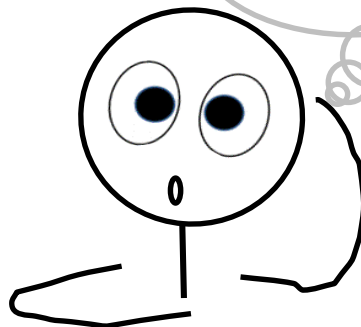
印象に残ったもの

- ・ 底びき船の生活リズム 淡々とした仕事ぶり
- ・ 「また、きたか！」 家路につくお顔

お返ししたものの

- ・ 論文での謝辞
- ・ 学位論文 (謹呈)
- ・ 魚の生態知見

研究者として、
出来ることは？



漁業の一般的なイメージに違和感

・・・取り組み・規制も沢山ある中頑張ってるのに
褒められることは少ない

研究者は第三者であるべき 偏ってないか？
資源評価・管理していると無意識のうちに偏る

学生時代、まともにお返しできなかった

せめて、

漁師の顔を思い浮かべながら考える

研究者になりたい